

島の暮れ方の話

小川未明

青空文庫

南方なんぽうの暖あたたかな島しまでありました。そこには冬ふゆといつても、名なばかりで、いつも花はなが咲さき乱みだれていました。

ある早そうしゅん春はるの、黄たそがれ昏くれのことでありました。一人ひとりの旅たびびと人は、道みちを急いそいでいました。このあたりは、はじめととみえて、右みぎを見たり、左ひだりを見たりして、自分じぶんのゆく村むらを探さがしていたのであります。

この旅たびびと人は、ここにくるまでには、長ながい道みちを歩あるきました。また、船ふねにも乗のらなければなりません。遠とほい国くにから、この島しまに住すんでいる、親しんせき戚せきのものをたずねてきたのであります。

旅たびびと人は、道みちぼたに水すいせん仙せんの花はなが夢ゆめのように咲さいているのを見みました。また、山やまに真まつ赤かなつばきの花はなが咲さいているのを見みました。そして、そのあたりは野の原はらや、丘おかであつて、人家じんかというものを見みませんでした。暖あたたかな風かぜは、海うみの方ほうから吹ふいてきました。その風かぜには、花はなの香かおりが含ふくんでいました。そして、日ひはだんだんと西にしの山やまの端はに沈しずみかけていたのであります。

「もう日ひが暮くれかかるが、どう道みちをいったら、自分じぶんのゆこうとする村むらに着つくだろう。」と、

旅人は立ち止まつて思案しました。

どうか、このあたりに、聞くような家が、ないかと、また、しばらく、右を見たり、左を見たりして歩いてゆきました。ただ、波の岩に打ち寄せて碎ける音が、静かな夕空の下に、かすかに聞こえてくるばかりであります。

このとき、ふと旅人は、あちらに一軒のわら屋を見つけました。その屋根はとび色がかっていました。彼はその家の方に近づいてゆきますと、みすぼらしい家であつて、垣根などが壊れて、手を入れたようすとありません。彼は、だれが、その家に住んでいるのだろうと思ひました。

だんだん近づくと、旅人は、二度びつくりいたしました。それはそれは美しい、いままでに見たことのないような、若い女がその家の門にしよんぼりと立つていたのでした。女は、長い髪を肩から後ろに垂れていました。齒は細かく清らかで、目は、すきとおるように澄んでいて、唇は花のようにうるわしく、その額の色は白かったのです。

旅人は、どうして、こんな島に、こうした美しい女が住んでいるかと思ひました。またこんな島だからこそ、こうした美しい女が住んでいるのだとも考えました。

旅人は、女の前までいって、

「わたしはお宮のある村へゆきたいと思うのですが、どの道をいったらいいでしょうか。」
 といつて、たずねました。

「あなたは、にこやかに、さびしい笑顔を顔にかへました。」

「あなたは、旅のお人ですね。」といいました。

「そうです。」と、旅人は答えました。

「あなたは、すこしばかり、ためらつてみえましたが、」

「わたしは、どうせあちらの方までゆきますから、そこまで、ごいっしょにまいりましよう。」といいました。

旅人は、「どうぞそうお願いいたします。」と頼みました。そして、二人は、道を歩きかけたときに、旅人は、女を振り向いて、

「あの家は、あなたのお住まいではないのですか？」とききました。すると、女はやさしい声で、

「いいえ、なんであれがわたしの家なものですか。今日はわたしの二人の子供たちが、遊びに出て、まだ帰つてきませんから、迎えに出たのです。すると、あの家の壁板に、去年いなくなつた、わたしの妹の着物に似たのがかかっていますので、ついぼんやりと

思案に暮れていたのをごさいます。」と、女は答えました。

旅人は、不思議なことを聞くものだと驚いて、美しい女の横顔をしみじみと見守りました。ちようど、そのとき、あちらから、

「お母さん！」

「お母さん！」

といつて、二人のかわいらしい子供が駆けてきました。女は、喜んで、二人の子供を自分の胸に抱きました。

「わたしたちは、ここでお別れいたします。あなたは、この道をまっすぐにおゆきなさると、じきにお宮のある村に出ますから。」と、女は旅人に道を教えて、花の咲く、細道を二人の女の子といっしよに、さびしい、波の音の間こえる山のすその方へと指してゆきました。

旅人は、それと反対に山について、だんだん奥に深く入ってゆきました。山々に、はみかんが、まだなつているところもありました。そして、まったく、日が暮れた時分、思つた村につくことができたのであります。

その夜、燈火の下で旅人は、親戚の人々に、その日不思議な美しい女を見たこ

と、そして、その女はあちらのさびしい、山のすその方へと草道を分けていったことを、話したのであります。

そのとき、親戚の人は、驚いた顔つきをして、

「あんな方には、家がないはずだが。」といいました。

旅人は、また、「妹の着物に、よく似た着物が壁板にかかっていた——その妹は、去年行方がわからなくなつた——。」といった女の言葉を、いぶかしく思わずにはいられませんでした。

翌日、旅人は、親戚の人といつしよに、昨日、女がその家の門に立っていたところ

ろまでいつてみることにしました。

南の島の気候は、暖かです。空はうつとりしていました。そして、みつばちは、花に集まつていました。旅人は、昨日の黄昏方見たわら屋までやってきますと、その家は、まったくの破れ家で、だれも住んでいませんでした。そして、壁板のところをながめますと、美しいちようの翼が、大きくもの巢にかかっていたのであります。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 3」講談社

1977（昭和52）年1月10日第1刷

1981（昭和56）年1月6日第7刷

※表題は底本では、「島《しま》の暮《く》れ方《がた》の話《はなし》」となっていて
す。

入力：ぷろぼの青空工作員チーム入力班

校正：江村秀之

2014年1月18日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

島の暮れ方の話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>